

復活の初優勝

中学に続き高校でも制覇

《第45回九州ジュニア選手権競技》

男子の部 15～17歳

～久住高原ゴルフ倶楽部

通算 12アンダー 132

東恩納 昊貴（エナジックススポーツ高3年）



文字通り復活の優勝である。東恩納は普天間中2年の2022年に全国中学校選手権男子個人の部を制し、翌23年には九州ジュニア選手権でも頂点に立った。ジュニア界でその名前を広く知られた。エナジックススポーツ高1年では九州ジュニアで8位に入りジャパンに駒を進めたが、昨年の同大会では8オーバーで24位タイ。全国大会出場も断たれた。この時のウィナーはチームメートの呉屋陽星。仲間の優勝を横目で見ることができなかった。不調のどん底をさまよっていたのである。

「体も大きくなり、体のバランスが悪くなっていたようです。ドライバーの不調がきつく、長い間、結果が出ませんでした」と当時を振り返る。そんな中でも「心が折れないように気を付けていました。ゴルフはいろんなことがある。気長にやろう」と自分に言い聞かせながらボールを打ち続けた。

そんな折に、飛距離を求めてドロウを持ち球にしていたのを、思い切ってフェードに変えた。平均飛距離は270ヤード。飛距離はドロウより少々落ちるが「ミスショットをしてもコース内に残る」と不安と縁が切れた。今では「ゴルフが楽しいし、ドロウにこだわる必要もない。もう、ドロウは打てません（笑）」とまでになった。そうすると、結果にも表れる。

今大会の初日、8バーディー、1ボギーの自己ベストタイの65で首位タイのスタートを切ると、最終日の第2ラウンドは前半のアウトを1バーディー、ノーボギーの35。後半のインでは10番でボギーをたたくが、11、12番の連続バーディーで取り返し、14番ミドル（397ヤード）では第1打がカート道に跳ねて1オン。カップ左5mのイーグルパットを決めて優勝をたぐり寄せた。2ラウンド12アンダーは自己ベストとなった。「この2日間、思うようないいプレーができました」とにこやかに笑う。



今後の目標は大学に進学して、プロを目指すというもの。その前の大事な大会が8月の日本ジュニア選手権。これまで東恩納は中2から3度出場しているが、22年31位（+12）、23年15位（+4）、24年69位タイ（+6）と芳しくない。「悔いが残らないよう、攻めて優勝目指して頑張りたい」。持ち球をドロウからフェードに変えて初めての日本ジュニア。気持ち的にも充実している東恩納の本番に注目である。

余裕の初優勝

OB3発も2日間アンダー

《第45回九州ジュニア選手権競技》

男子の部12～14歳

～久住高原ゴルフ倶楽部

通算4アンダー 140

張 峻苒（日章学園中3年）



中学生の中に大学生ー。そんなムードを漂わせる。185cm近い身長に体重は80kg超。足の大きさは30・5cm。一緒に回る中学生が気の毒になるほどだ。張のド

ライバーの飛距離はキャリーで300ヤード。同じ組の選手を40～50ヤードも置いていく。これらを武器に九州の初の頂点に立った。

「今日はショットが悪かった。パターのおかげ。前半は特にパットが良かった」。インスタート。11番で5m、12番で1mのバーディーパットを沈め、18番ロングでは残り220ヤードを4Iで2オンに成功して楽々のバーディーと9ホールを33で折り返した。アウトに入ると、第1打を1番で左、5番では右とOBを打ち、ともにダブルボギーとしながらも3、7番でバーディーを奪って後半は38。初日も2番の第2打のOBでダブルボギーとしたが、69でホールアウト。2日間でOB3発のダブルボギー3個でも、いずれもアンダーパーをマークした。それはバーディーを取れる力がある証拠。張は2ラウンドで12個のバーディーを決めている。

「バーディーを取れる力が上がったと思う。ボギーを打っても、やれる。大会前、パットの練習をよくしました。ラインを正確に読み、タッチも大事に」。パッティングの刺激は6月に出場した九州オープンで受けた。張は予選落ちしたが、プロのパットのうまさに改めて目を見張る。「いい経験になりました」と価値ある出場となった。



経験と言え、今年5月の九州アマではつらさも味わった。3日目までトップを走りながら、最終日にスコア誤記で失格。日本アマ出場も閉ざされた。あれから2カ月。「もう大丈夫です」。それは今回の優勝が証明した。

日本ジュニアは昨年に続き2年連続2度目。初出場の昨年は優勝争いを演じ、最終的には1位に2打差の2位。「中学最後ですし、大事な大会。優勝を目指します」とターゲットを絞る。

中学卒業後は通信制の高校を考えているという。

